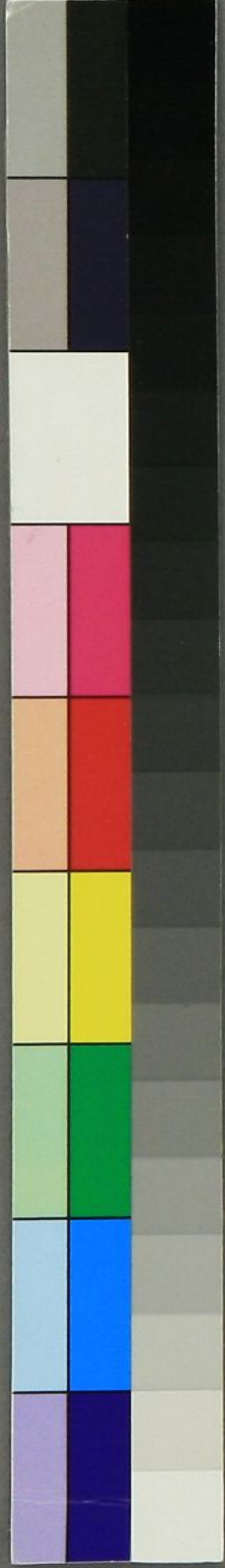


亡友梧堂遺事

春城學人

特別
14
1919
661



二
隨見隨錄

176930

あは余が岡山言行録を編輯せんとする時筆沓せり
もの編輯を山田霜岳に托しこより其稿の取捨も一
小霜岳に委し印行せり言行録に上らざるもの少し
とせり余之を以て遺憾とし特に旧稿を保存し他
日の参考に供せんことす

廿八年九月

春城學人識

一、君の甫成学校に在りや讀書に勤勉の人ありしも終日
書物と但打とあまか如き書齋にはあらざりし君は諸書
の内何彼の嫌ひなく一様に之れを脩め何れの科目を
も極めて愉快に學ばれたるか如し君は書を讀むに達者
の方にはあらざりしも衆人に勝れたる會得力を有し又
超凡ある記憶を有されたるを賞ゆ君は同窓の如く博識
を貪りて課外の書を多く讀むと無りし然んとも君は
一書を廣く利用するの頭腦を有されたれば君の一書を
讀むは他人が十書を讀むにも儼りたりき
一、君は非常の觀察力を有したりき吾亦天然に之れを有

したりと言は人より観察力の培養を力めたりと言ふか
た却てきれりて賞や君は一丘に上り一草を振み一石を
拾ふも之を軽々に看過し去らば其物に就ては其の可得
せる理学の何らん限りを應用し種々の理窟を研けて傍
人の厥ふを顧みず余か君と清水寺の宝物を是たるとす
の如き五三十五計りの書画骨董類を一々品購して凡そ
一時間余りに涉り炎暑甚と際すの候余を以て閉口せし
めたる事とありき蓋し當時君か事柄を觀察する抵古
事跡に過ぎきまゝ人をも絶倒せしむるもの少きあり
さりきも君か法律事務を取らば定むる看眼の慧敏用意
周到同業を以て到底及ぶなきの歎を度せしめたるもの
此觀察力培養の切に依らまと言ふ可らま余か君と相携

て教百里の長程を跋渉し得る所願の多かりきも君の以
辭に依れり

一、君は極め訥辯の人なりし然れども在学の時より議論
を好むと酒色嗜ふらそ人と議論を渉れは對等の屈せ
ざる限りは君法に自ら屈せき温容君の如き人より
能く斯くまて剛情ありやと思はしむる者ありき余は開
成子校に在る時日曜毎に君と相携て墨堤東台等に散策
するところ常よりしか校門を去れば忽ち議論湧き辯難
論駁教里の間義人と歩の程を知らずと常よりき
一日例の如く互に議論を闘はし黒堤に遊む枕檣辺に
君の舎兄定恒君に遇ふ定恒君余等を呼みも知らずと
過き歸路君ら泉と本所表町に訪ふて始めて逢上定恒表

と相會したるを聞き互に一天を備したる事ありき君
か議論を好むの状以て一班を窺ふし

一、君は終生訥辨の方よりしも議論は年を追ふと益々進
み一種他人の及ばざる技倆を有するに至りし君は何事
も議論を扶めり而して敢て初めより腹案ありにあら
ざれば論端は甚だ簡略しく箴人と解き一からざるもの
あれども既にし腹案熟し新論湧き出づる論題を豫て講
究し置けりか如く終身人をして感服せしむるもの多か
りき君が法廷に於ける辨論も概ね此類なりしと云ふ
余は平素君に戯れて曰く君はよく辨を然れども益々益
辨きよに非ず所謂の教てあるを音ありと君苦笑して服
せりしも此の戲評は幾分か當れりと言ふ

一、君は能く談し能く客に接するの事ありき君が代表の
業務に從事して門前市を去るの盛を極めたるもの君が
特得の技能を君が天稟の深印に依ると是亦た以性によ
らず人はあらざる君は如何に繁忙を極むるも客を謝して
空しく帰らしめることあり訥論依頼の客の如き常に事務
所に滿つるも君代人として代接せしめ自ら之に接し
て淳々として語り繁々として説き訥論の長は詠頭
その他に轉じて往々教時向き渉るの長は論をすし或は食
を忘る或は他案をすし欠件に堪へずらるる事あり
而して書生他案の待らるる久しきを告ぐれば箴人との
れを知らざりしもの、如く勿杞辭して他案に接するこ
と亦前の如し余の如き君が事務所に訪ひ余りに待たる

たびれ帰りのことも屢々ありき然れども他客は待
ちくたびるを以て不平を鳴らざる蓋し一たび君に接
すれば厚々赤誠を吐き春風の裡に在るの思を扱せばふ
り
一、君は人に接するに初めて鄭重なりて客の品考により
辞を高卑し待遇を異にするの人にあらずし君が大學
の業を卒り代言業務を始め西河岸に開くや當時法律
士高橋一勝氏は接客の態即を以て評判高なりしが君貌
許も亦く一勝氏と比肩の地位に進むや時人兩氏を對比
して一勝氏の態切は君に及ばずと云せり蓋し一勝氏は
人の品考に依り態度振りを変したるも君は法に於て
無りしを以てあり

一、君の平生は法律事務を以て勤まられたるを以て文章の
如きは固より其長所に非ずと足君は先考の董陶に依り
開成学校にありしとき如きは巧みなる文章を作られた
り君は君にして文學を専門とすの志ありしを以ては
乏孤ある文章家とありたりしを以て君が私會に在り
て將た月一会(皆開成学校東京大學に於ける会なり)に於
て演説の爲めに物せる論文の如きは當時文學生の文章
に譲らざりき然し君は文學思想に富み時々は國歌を
詠し或は政譚を小説作りに仕籠の才をも有るを以て
實も今は早や筆柄を忘れたるも或漢氏の際流談を月一
會(歴史風俗考を談する同志の会なり)に於て小説作りに
演ぜり此たるを以てありしか君の訥辯に似る拾遺一篇の

ロビンソン・クルソーを読む可如く大に興味を感じた。
ちこありき此等は固より君か未藝よりと疏人と言ふに
足らきと是は學界に在る人概ね文學思想に乏しき故
に君は政例の一ある事をも、に託し置く事
一君は東都第の法律家ありしを以て君の少時を知らさ
る人は君の老始めより法律に在りたりと思ふものあり
ん然れども余か知る所を以てす此は君か卒來の志は法
律にあらきしと經濟政治に在りたり然して大學の本科
に進むに方り枉けて法律を専門こしと撰はれたる理由
は余今詳かに記憶せきと是も確かに時來を洞見する思
慮ある採擇に出て法律を學べば自然政治經濟の助とあ
まは必然にして政治經濟の如きは独力よても備は得く

しと云ふの意見ありしやに實ふ而して君か法律を志す
に至りたるは何時の交りししや是れも詳しく記憶せず
れと確かに君かシドニー行の志を達する能はき失望を
懐み沈みたる後よりして實ふ明治 年シドニー存に
世界博覧会を開くの舉ありや君日本橋迄の某豪商に従
つて渡航せんとする志あり蓋し君は老時思へらく砲々
學業を修めて學者とあらんよりは寧ろ海外を跋渉し親
しく經濟政治の實現を操り同窓に先人じて早く活世界
に雄飛せんにはと而して渡航の約一たび成りて終に破
る此時君か失望の状余今に於て忘る、能はざる者あり
君は病と稱して白白寢室にありしか頗る苦悶を堪へず
る者の如く向々叫喚するを以て今は驚て寢室の戸を排

して入り其の病状を伺ふに君は事敗ると運呼して其他
を言はさ余は其意を解さる能はさ辭かに向ふて始め
其実を得たり蓋し君はレドニ一行を絶して人に誤らさ
余の如きも初めて此時之を聞き考めに一驚を喫したる
事ありき君が志の老時政治経済に在りし一端は之を以
て知るを得し

一君は大学に在るの時より儉素を貴む衣服持物の如き
は法して翹野るるを嫌はりし亦た酒食の文際も如き
は常に之を避けて暇あれば先考を本所に向はれたる君
は自主の志厚く常に舎兄定恒君に金貨上の累を及すは
本意に非ざるとして囊中一孔の錢ふきも舎兄に求めし
止みたるものと屢々ありき老時厩橋は八厘の橋錢を課そ

る頃にて君が本所に往来するには勢ひ此橋を渡らざら
と得る而して囊中或は一厘ふく市島君一身計り持めか
杯まはれたる事も教々ありき余も時には囊中無一物と
て同窓皆外に出て、何人もあらざる休日の如きは八
厘に差支へて君は本所に帰らざることも同々ありし之
を君が堂々法法世界に交際社会に馳騁するの他日に比
すれば茫乎として夢の如しとをも君在學中の性行を知
らんを叙せば此頃亦漏らざる可らざるなり

一君が儉素を貴むたるは法して資を舎兄に仰ぐ在學中
のみよはあらざるなり君は堂々大門戸を張るに及むて
も自ら奉ずるものと甚だ薄く豪華を競ふ同業者とは自ら
其橋を異にせり君常に後進の奢侈に流るるを憤慨し折

に飽れては之れを戒めて曰く君等一月幾許の金あれは
足るや余君自ら言ふを以て見れば三四にて餘あり試に
去りて日本橋に至り車夫と仕を著して彼の一握金あ
る切餅を食へ三歩を投ずれば腹を飽すに足らざるや一日
九次一日二回七十歩に過ぎず君一夫れ寝臥の如きは
地を寝臺として一睡すれば則ち可なりと流石と激に過
くと見ゆ君はははは斯く張苦を言ふも人よはあらざ
りき

一君は自ら奉ざる極めて薄かりしも露程も鄙吝の考を
有する人にはあらざりき君は朋友故旧の窮乏を救ふに
は大金を投じて聊かも惜む氣色なく亦義舉を勵むるに
は限あらん限りの方を用ひられたる但し君は自主の心

に富み剋己の念熾んずる人よりしよを自然他人にも之
を及ぼさんと欲しむる人の自主を害する虞あるときは
君は涙を垂れて其人の窮乏憐れむも其の請ふかまへに
多くの金銭を照らすこと無りき亦高利貸借の如き今日
都下の風として多少位地あるものは情義上友人の請ふ
に遇へば名義を償ふこと己むを得ざる実況されども君
は其弊を厭ふか故に峻拒して一たい由之に應ぜざる
場合に際されば君は自ら其金を償へ君は思ふるを常
とせり亦金額大りし自ら辨し難きときは君は其人の
ために百方経畫して遂に其人をして目的を達せしめた
り

一君が官業上の所得は頗る多かりしも之を以て算定を

飾り器物を弄にまふ等の念聊もあふく皆不積むて
他日事業を考すの資に供せんことせり君は常に曰く余は
法律事務を執ると志本末の志は之にあらずして寧ろ経
済政治に在り但大経済政治の業は空拳を以てすし得ん
きにあらず余は僅事を主として金銭を浪費せざるは他日
政治家たらんと欲するかおもしろしと亦君は未だ饒産を擁
するに至らざりしき時常に親友に語りて曰く吾も同人
皆不食食にしく吾人と事をあそび得んや君等浪りに金
銭を以て余を累す莫れ余未だ産を成すべしに之を殺す
は是れ諸君自ら己れの手足を断つて等しからざるやと君
か痛々たる辯護士と自ら其襟を異にする亦以て見よ可
す也

一、君の志経済政治に在りしを以て生を終るまを常に意を
以て意に就き向事にはるも一家の定見を有し人と會を
れば持説を吐露し互に議論を闘ふを以て其上もなき快
事とせり明治二十一年の交金は新潟より上京して君
が龍岡所の邸に一周向餘宿泊せしことありしか君は晝
日は法律事務に忙はしく大抵十時若くは十一時の頃より
ては帰宅せりしか帰宅するや否や袴も解かぬ勿に余
が室に入り来り余が熟睡せしを叫び起して枕頭を啜る
組み煙管を唾壺に叩て君得意の政治談に入り縁人と終
日の疲勞を感せり若くは如く痛々教言口を衝て出て
て感止する所なく或は二時を過くも寤寢に就かざる
も間々ありて余より就眠を促すこと屢々ありて君の政

談を好むの一端之を以て徴するを得し

一、君は大學に在るの頃より經濟上は保護貿易主義を執り余は之に反して自由貿易主義を執りたりき君は余が君と議論を闘はしたる問題他少からぬと就中此問題に就くは幾十回と多く議論したるこゝありし而して君は終生其説を変せき幾十年の久しき余も多少君の爲めに代せられて遂には日本の爲め保護貿易主義を執るのこゝを爲すと云はしむるに至れり

一、君は平素私立大學を設るの冀望を抱きたりき君は小野梓氏が大隈伯を助け東京専門学校を設立するや君は他日之を私立大學に進むの考を以て賛成を表したり英吉利法律学校即ち今の法學院に對するも亦然

り而して英吉利法律学校か明治 年頃隆盛を極めたりし時分には氏は平素の冀望を數々折衷し民間の諸法律學校を合併し一の法律大學校を設けんとす少許計畫ありたる事ありて頃か明治十 年の交余が新潟より東京

して君が家に宿泊せる時君は頻りに諸學校合併論を主張し多くの機械を要する 理學の如きは之を政務所置の大學に屬すること已むを得ると是法學の如きは必しも政府所置の大學の一科と爲すを要せき方今法律學校の競ふて起る氣運を以て卜すれば此種の學科は最早私立大學に委して可きと論せられたる事ありし然れども合併の事は實地に行はれずし

一、君は政府に於て熱心改進主義を把持したりき然れど

も小黨の割據種々の情勢を生し斯の主義の普行を妨
と見るや到底改進黨を以て論く曰主義者を包羅する能
はずと云し苦心傍聴種々の経営を考へたる中にも明治
俱樂部の如きは最も君が心血を瀦きたる所なり當時余
は新潟に在りて黨事に奔走し居りしか表は明治俱樂部
設立の趣旨方策等を微細に認め二丈に餘る書翰を寄せ
られたるものとあり君の筆無性と以て此長文の書翰を作
る其熱心亦た以て想ふべし右の書翰は今尚ほ藏して余
が家に在り君が當時の改進黨見と知りには屈竟の材料
なりとも文中公表を憚る事實少からざるを以て遺恨
あから全文をここに掲出するを得る要は改進黨の範圍
狭小に失し普く人材を網羅するに足らざるを以て別に

社交俱樂部を設けて改進黨の別働隊とし之に法律上改
進黨に加盟すべからざる者若くは公然入黨を憚る者を網
羅して除るに國會開設の準備を考へんとするに在り
一、君が此俱樂部の設立維持に全力を傾けたるに拘らそ
時運非にして設立後久しからざるに遂に廢滅に歸した
り然れども君の方案全く水沓に属したるに非ざるは是
時新潟縣に在りて略々同一の経画をなすし同好会と名く
る社交俱樂部を設置し之れが全力を注ぎつゝありしか
君の方案を得て證明する所少かりき拮据経営の結果三
年と出たを以て全縣下に十數萬の同志を得る自由黨
の跳梁に委ねたる新潟縣の形勢を一変し恰も其位地を
易へて改進黨の世界となしたる者君の方案照りて力あ

しと云ふ可らず然らば君の心血を瀦きたる御軍は之を
東京に見すして新陽に見たりと云ふを得へき歟

一、大同團結と云一は後藤伯の創意に係りか如く人或は
國推すへきも岡山君は實に度起者中の度起者ありし而
て之れを度起したる趣旨も又明治俱樂部の如く大同の
旗下に各黨の純良分子を集めんとすに外あらきりし
去れは後藤伯が大石正巳氏を伴ふて我北越に入ると申越
は殊に余に簡しし余の同意を後藤伯に紹介せよと申越
せり然るに余は最初より大同團結の譽を喜ばざりし勿
論其趣旨にはては格別の異議ありにあらざれと北越に
於ては到底望みて得へからざるの事ありし蓋し當時新
陽界に於ては改進黨義較之萌芽を度したる際にて之れ

と一團の改進黨とあさんとは熱い戦を反對党と挑み其の
刺戟を藉りて黨勢を激成せしむ可らざる即ち岡山君等か
大同團結を東京に度起したる頃は新陽にありし余が挑
戦を試みつゝある真最中には後藤伯北越に来ると聞く
や挑戦は絶頂に達せり此時にきり設令大同團結を可こ
するも行掛上連合などの届く可きにあらずし又連合
を試みる可きに我は微弱なり彼は多年根據を築りて
其勢力を可らざる者あり君は漫りに連合を企ては
大同團結は名のみにて我れは唯吸収せられ彼等の餌と
なりしらんのみ去るにても後藤の術を多る後藤伯より
て徹心誠意大同團結を組織せんことをに在りて他に私
心ある人は或は提携の手段も無きにあらざりしおらん

然れども如城は固と後藤伯の望む可らざる事にして伯
は口を開けは直ちに改進黨を罵罵して偏に自由黨の款
心を得るに汲々たり詮令岡山君其他諸友の執心ある節
誘ありとも余如何を所思を托けて伯の野心を幫助する
に忍びんや余は唯たに君の勅誘に任はさるのみあらま
却つて後藤伯の来越を様とて大に自由黨を駁む若少教
同志として九鼎大呂よりも重かりしめたり北越改進黨
の今日あるも實は此時より胎胎し来たれり後岡山君此
等の事を聞き散々に苦情を鳴し越したれども岡山君等
の経画利の處に齟齬し余か及拜還勅却つて効果を今日
に遺したるを見れば君の散々の苦情は却つて謂ふ事に
似たり余は君の生前屢々此時の事情を語りたりか君の

剛腹を以てするも能く辨する哉はさりし
一余か後藤伯に對する如城よりしも大石正巳氏に對し
ては岡山君より特に親密の文を望む旨申来りたれは其
意を諒し氏か新陽滞在四日間は縁人と晝夜坐臥飲食を
共にし互に胸襟を披きたり余は決次大石氏に言て曰く
君の大回團結を説く其趣旨甚た可なり後藤伯の言論君
の説の如くあらざるは如何と大石氏苦笑して曰く彼
説に同一からまると勅もすれば人の怒を招くものは彼
れか演説の拙まるを以てまると余は之を以て道辭に過
きすと云せしか大石氏と別するの前夜赤心を披瀝して
曰く後藤伯の言行より余徹頭徹尾及拜去と是も君のあ
めに聊か一言せん北越の人智後藤伯の無責任論を傾聴

するに切辨ありき人心久しく自由愛の狂暴に飽き又
伯に依りて之を見ざるを欲せしを承く自由黨以外に味方と
得人と欲せば大に言論を博し看實穩當の手段に依らざる
可らまこと依りて滿身に縣下の形勢を識り余が忠告を
伯に傳へんことを以てま伯これより暴慢の言を承きま
蓋し余が忠告を容れたるか但しは余の反抗運動に若み
る所ありしか格堂君の言行録には要すべきことされども
事の序に一書し置く

一明治二十四年十二月二十五日帝國議會解散を命ぜら
るや曩きに君と推せしる静岡果三已有志者は再た
君を候補とせし推薦せんとして人を東京に遣はして君の
承諾を求む君再三辭して受けま余も亦君の肺患全治に

到らざるに代言の劇務を執りつ、更らに心を議院に勞
するもの不可を鳴らし君も辭任を勧む君の曰く余は断
乎とて辭ましく然れども病の故を以て辭まざる能は
ず余が辭まざる所以は別に存まこと越へて四五日君余に大
むに代りて推奉已に赴き辭任の演説をおさるんことを
以てま蓋し君醫師のあめ聲を禁せられ演説をおさる
はさるか故ま余は手素君が政見を承り亦辭任の
理由を知り代演をおさるに特に趣旨を問ふを要せし別ち
諸君と直ちに行く實に明治二十五年一月の中流ま
一君に代りて静岡果三已島田再枝の両所に余をかきし
左の演説は君の政見の百か一をも盡まると是も今
尤に其要を録して其一概を知りの要科に供せん

一、君か多くの友人の爲め配遇と媒物せし事とは別項記
するか如くまゝか岡田良平氏の媒約に付き想ひ起き一
余の旧夢誼あり君と明治十二年の夏東海道を漫遊する
や偶々遠州掛川を過く時良平氏の父岡田良一郎氏佐
野城東の郡長たり而して郡役所は掛川に在り岡田君曰
向く良一郎氏の乃父佐平治氏二宮尊徳翁の門に入りて
報徳の教を受け之れを岡田に實施し報徳講を組織して
より椽樞の街大に進み蓋御家人と貧者まきにまかりと
君良一郎氏よりくに報徳講組織の詳細を以てせは蓋
し得る所歟あらざる一しと相携りて氏を郡衙に訪ふ偶々
暑中休暇を以て在らざるに氏を倉敷村に訪ふ倉敷村
は良一郎氏居位の地にして掛川を距ること一里許岡田

を辿りて行く時搦に正午に悪人こゝに突異頭を焦す漸や
くよりて到ぬは一大茅舎を得たり即ち岡田氏の居る
刺を通りて面会を成す氏事に托して過はき余等懐き快
からざるも空しく帰るを欲せき更らに懇懇来意を告げ
漸やく一室に通るを得たり室四方障壁を以て固み微風
の通するを許さき而して待らること一時間余にして漸く
主人出て来ぬは余等を目して世の生意氣書生一輩の徒
と爲さ者の如く喋々輕語の徒と弄りて底止まる所を知
らる余等拂然其妄を弁して漸やく談頭を轉るれば更ら
に當世の名流を罵り泰西積学の迂陋を笑ふ余等放言の
の甚しきを惡み試みに外國流を解し信々やと問へば氏
は傲然として曰く余は漢末の書を讀む能はざるれども

スミスの富國論三の経済書及翻本に就て一二頁を讀
み事九は皆喧上の空談よりして流むに堪くそと余考は其
の傳に後きるに足らざるを覺り勿々辭して掛川の旅館
に帰ぬは岡山君は暑氣に中り一夕大日困女たり而して
何んを回らん泰西の學術を迂陋と評せり岡田氏の
門より洋學士を去し執天馬席くしき教教又困められ
たる岡山君其人の子息のあめは媒妁の言を西らんとは
一、君志を得て素州
に教所歩の山林を購ふ蓋し
は先考嘗て岳匠の地より君以山林の所得少くして
費す所多きこ知るも鄭重之を保護して人子讓らる或人
君に説くに之れを所有するの不利なるを以てし價の高
きに乘し之を賣らんことを勸む君頭を掉りて曰く

は墳墓の地より利益のあめに存するにあらざる利
益のあめに之を失はく余は何の面目ありて亡父に見へ
んと君の富薄亦以て見る可し

一、君は無益の金銭を散らるるを厭ひ小児のあめに玩具を
購ふときよりは必き土度を低度とす之より出つることお
し兒女不平を鳴きも君固く執りて聽かそ一日兒女を携
へて淺草を道通して仲見世を過く息陽齡四五歳玩具店
頭西洋人形の存るを見知りて己まを長女齡七八歳數字
を解き點紙を熟視し無心に請ふて曰く請ふ之を欲する
を休めよ此玩具は價二十元節々は五厘以上のものを買
はも何んぞ此價高き玩具を買はんやと流石の控堂君も
之れが為めに難易まこと令妹の訴ふる

一朋族 年若の始めて法律事務所を西河岸に開きた
る頃は依頼人甚た少く君の復讐を以てするも毎月の
収入支出と償ふに足らざる然れども君は神助と念兄老く
は親戚に請ふて欲せし百事を省略して僅かに補綴した
り云ふ令妹の借ぶ、所に依りて當時令妹は事務所の
会計系に賄方を掌らるる月末には毎に窮して多くも
あらざる令妹所持の小遣錢を以て僅かに当座を築いた
ることも屬ありし由りて君が衣服の如き僅かに一領
も存するに過ぎず去れは令妹も是事おて自身の下着を
與へられたるに君は晝夜之と看して暇くことなきよそ
忽にして無教の風湧き令妹も之を駈りに由りて一時道
にヒリヒリと掛け殺したることありと知られたる今

日の并獲士の開店勿々聲澤と極め収支の償はまるは高
利を以て之れを補ひ性として願ひするの類と其差字に
天壤差ありたるものありを見りて
一、君斯く窮乏ありての内こ尼も尚ほ一片の義氣を存し
人の意を以ては自家の命を去れを之を救はんと欲を明
治十一年友人某大坂に赴きて代言事業を営む人こそ出
度に臨むて費足らざるを告げて三十金を求む
君諾して還り令妹に謀る令妹曰く事務所の経費高は且
つ足らざる何人の剩餘金あるらんか格堂君曰く余之を知
らざるにあらざる唯既に友人に謀らるるを奈何せん之れ
を人より借る敢て難き事あらざる然れども余は金を借る
を好まず卿に貯金あらば請ふ吾れに貸與せよと之を戒

むこの切なる家も小児の慈母も柔き赤むのか如し令妹
偶々三十餘金の驛邊野舎あり則ち宿して悉く君の用に
供き君深く謝して曰く必らき君は御に報ゆる所あらん
と後志を導るに迄むて毎月君千の金を令妹に贈りて曰
くこれ彼の時の禮なり」と是れも亦令妹の法なり
一、切サの頃より抱負する所大なりしと見え遊戯の隙に
僕は他日殿様とあらん杯言はれたること屢々ありしと
去ふ君か長遊の前一年君か曾て養はれたる房の赤岩氏
夫婦始めて君を龍岡所の邸に訪ひ邸宅を周覽し其の壯
麗に驚き坐るに懐旧の情に堪へき二十五年前君か赤
岩家に在りし時の事共を語りあてて曰く君髪亂の頃は
折々触れしは殿様とありしと言はれたるを時其大言を思

みちうに今よりと思へは大きな言ふあらき君は實に殿様と
あられたりと歎息せりとせん

一、余か性豪放君も性謹薄余酒を嗜み君酒を好まき兩人
の嗜好を異にする性々奇談を生ず大學に在り頃一夕三
伏炎執の候よりし君を拉して明神の御花桶に飲む君有
を食ひ余益々嗜み激談高笑時を移るを知らず終に十二
時を過く君切に帰るを促すことも會酒を食ひて容易に起
たき唯上醉劇天明に至るを覺へず翌朝四邊を歩むに
岡山君在らき唯た花籠の下鞆靴の聲を聞くと先生ありに
御さんされと笑て叫ひ起せば君は眼を擦りつゝ前夜の
苦情を鳴らして曰く君も早酔御に入りて知らぬと余は
過官致す襲はれと一睡を導き餘りに堪へず執事と忍

むて櫃下に蚊を避けたるる疲勞せるまゝ、僅かに困り
一夢を徒ふを得たりと君は如何に共一事に困りけん存
生中は折に触れれば其時の苦情を憶返したり
一、十二年の夏君は携つて東海東山を漫遊するや余は大
盆を壞りて酒床を夏れば直ちに入りて飲む而して君
は去る上屋を過くれば窓放ちて飛入り余が嗜まざるを
知りて之を強ひ舞ひて酒の復讐とす然れども酒床は
利の處に在るも去る上屋は名曰大驛と名も必きりも在
らる岡山表刺合要しと日々愚痴とよばる余興に乗し
て益々酒床に入り君の足を駐む一日大雪山中寢寢の里
を過き浦島の淵に臨めり一亭に控を櫛に凭りて仰けは
奇樹天に参りて新緑滴らんこゝ俯して櫛下を瞰れば怪

立而して淵の深き測る可らる余等實一寸杖と呼ぶ多た
酒を呼むて飲む岡山君曰く余下戸とすと是れ仙境に臨
むとい亦酔倒を辞せし諸ふ平日の恨を酬へん余曰く可
まろ君酔倒せば余看護せん諸ふ奴意する莫れと既にし
て兩人大いに酔ひ余は教人と執事を實へず天明余先づ
夢醒めて思へらく前夕岡山君に約する所あり而して自
ら前後を知らざるか如きは失態も亦極まる君し行李中
の者紛失せば何を以て君に辨せんと言うる市圍を抜け
出て、行李を檢するに兩人の財囊共に無し余愕然君を
呼び實して問へば何んぞ知らん看護を誤したる余先づ
酔倒し財囊は君却て保ち居らんとは君は余が呆然た
る侍を見て宛かも鬼の頭を取りたらん如くドウデス酒

君は大概ソノナ者ダ

一、君飲食に嗜好をこゝし、喫煙は君の最も嗜む所ありし、想ひ起す明治十二年七月君と中山道を跋涉す、や余は未だ喫煙を知らず、而して君は寸時も此物を飲め能はざるを、旅次偶々淺間山に登りて大いに疲る、君石に蹠して寸燐を摩し、喫煙せんとするも、摩器山間の濕氣を受けて度大せし、君試むること數十回箱をわに一空す、も高は度大せず、終に蓋底僅かに二本を刺すに至り、而して君が此二本を過たさらんことを如何と氣を病ましめ、精を籠めたりし、ぞ、余は傍らに在りて實におかしきに堪へざりき、而して余も亦終に君に譲らざるの喫煙家とす、わ、余豈今昔の感なきを得人や、後天師患

子罹り醫師のあめ嚴く喫煙を禁せらるゝ、や君は大に之を惑し、肺病は左の如くつらからざれど、喫煙の出来ざるは實に「つら」と時々不平を漏さんたり、去れば君の前は喫煙するを氣う毒と思ひ、余の如きは戒めて之れを節したることもありしか、談論孰すれば、君は禁を忘れて屢々余の壁前におる、巻煙草に手を出し、一喫漸やく覺りて棄てられたることもありし

一、君は客を愛し、敢て其多きを厭はざりし、故に交際頗る廣かりし、も外人との交際は縁人と絶無と云ふの態ありし、井上伯條約改正の當時、都人士或人、外風を學び、日本帰人、外國帰人の交際漸やく開けんとせし、頃君は余を新潟に訪ふて、話頭此事に及べば、曰く、西洋人は五月蠅も

のち余か妻は能く英語を通する由外國帰人と交際せしむるを欲せざるをうと語り終りて俄聲を且つ曰く「實は僕も更後に拙著に據るに君は其自白の如く英語は細君より拙著よりし

一、君は大学に在る頃好むて藤田東湖が教ふればはや二とせの旅まくら驚るれよし秋風もよこしはすすが聞きれてうきこもしらしき自雲の棚引く間より月のかけもすみだの夕えへ我云々の長歌を誦せられたり而して自らも之れを倣ふて一篇を作られたること記懐すれとも其稿は今存せず

一君の開成学校に在りや一笑談あり友人間に喧傳すとき時表は三崎電之脚田京榮拜田四郎教民并に余と余と同

ふして起卧相俟にも別室に△△△△あり余等同室の某の美を見て之を愛す而して某之を知らざるをう一夜燈を滅して皆寢に就く既にして一漢あり秘かに戸を排して入る室暗黒其雅なるを衆皆を屏息して其状を覗ふ漢知らざる衆既に眠ることをし南蘭して君の念に入る君も去るもの之を異しむも亦動せずを黙すること数刻終に堪へずして失笑を漢驚き怪み窺ふるを以て君の面を撫き君えに髯面長身の人とす漢見て大に驚き躍起して所々に逃げ去らんとす三崎氏乃ち傍らの寸燐を把つて火を點せ此は漢は△△△△△△△△として蓋し君を以て某と誤りたるをう

一君の一事を怪画まきや苟くも其目的を達せしめれば

也まき而して此の世實は早く在學中と現はれたる明は
十年の夏表と相携へて東海東山街道を跋渉するや偶
々虎引刺病各地に流行し名古屋に到る頃は京都以東病
勢猖獗を極め客の京都を経て東山道にあてんとする者
は官規四日市二箇ヶ存に五日間の滞留を命じ余等二、
二於て京都に入ると能はざる路を轉じて木蘇山中に入らん
とす而して箇ヶ存に到りたるは日既た西山に傾きたる
頃より未だ旅客を止めせ先づ防疫所に到る官更去て
て余等に滞留を命ずること豫期の如し表防疫地を經過
せざる者に滞在を命ずるの不当なるを諍して聽かざる
將一時間に及ぶも法せざる官難きを余おに求めて屈服せ
んと懇し防疫地を經過せざる 證據ありやと向ふ表曰く

有りことをすに道中日記を以てて官疑ふて法せざる更ら
に臺中を獲り表旅今の仕譯を申しと表官漸く疑を解
くも他客の同一手段に依はんことを恐れを落せざる然れ
ども表せざるは天明に達するも表の屈せざると思はれ
漸くにして滞留を免す時又夜將また九時に重人となる而
して兩人未だ旅宿を定めざる表は之を言たせざる山の
、如く一の目的を達せれば直ちに他の目的を達せんこ
とを望み表は更らに防疫官に請ふして曰く余等これ
より中山道を經て東京に歸らんことを而して偏くおれ
んは松井田に到れば官亦表千日の滞在を命ずること今
貴官此處に於て防疫地を經過せざることを認むる以上
は請ふおれに一扁の証明書と併へよ余等はこれに依り

松井田の滞るを免れんと欲せし蓋し東山道は未だ要
疫あり理に於て証明書を照しるも君支ありし而して
官先例なきを以て告げて之を照くも君曰方辨すも遂
に聴めず湯々一案あり余等告げて曰く君等郡役所に
到り之れを承めよ郡長必らき應せん余等之れを理せ
りと言しまりて郡役所に至り之を承むること族役所
於けよか如し郡吏亦先例なきを理因とて之を承む
又一場の大激論を聞て遂に十二時に達す郡吏氣挫けて
遂に積成を容る余等二、三初めて目的を達したりと宅
族宿は既に閉ちて投きき所なく加ふるに滞る客各旅
店に充墮し偶々逆旅を叫ひ起すも概ね謝絶せしむ
まゝ一宿の下女部屋に一夜を明かし余は頗る疲乏を極

めたりも君は卒然とて曰く此位の事ハ随分有り勝り
事マ

一君の病を養ふに播州赤石に在りや屢々復原を訪ふに
乱れ白沙の間を道違す一日壯大なる某旗寓に惣主人
高貴人來よこし茶しく高堂に招いて款待到らざるは
し君頼みに其意を察り故ら酒食を命せし唯た一瓶の
ラムネを傾け十銭銀貨を投じて接を下り此は驕奢風を
まじし小憩喫煙の案こ毛も二三十銭を投せざるも君か
十銭を投する蓋し待遇を償ふに足らざるも接婢宿か
に不平の色あり君はラムネの料を承む君は卒然とて
曰くラムネの料も亦十銭の内にあると是れ固く君が一
時の戯に出つと毛も君は深く之れを氣の毒に感じ而も

再び此様を思ひまき

一、君の右子中一突祇あり明治 年の暑中休暇に乗し
福島縣に赴ふ時君の舎元定恒君偶々三春の銀行に在
り君謂へらく三春に到らば前途の旅費を辨するを得ん
と囊中僅かに數金を携へて度程す君固より旅費を主と
し車馬を買ふか如きは極めて少水なる所なりとも三春
に到る交は囊中幾人と一室僅かに一泊の料を剩きたり
きま而して定恒君を訪へば君偶々十數里以外に出で、
在らき兼告君大いに窮するも銀行員之を察せき君を一
大旅館に延き時に僥待せしむ君宿かに謂へらく僥遇如
此人は勢ひ多くの奉代を授せしむを得る但た囊中一泊
の料を剩きたり過ぎさるるを幸何せんといふ一計を案

して曰く今や聖駕北巡の事あり官吏の此家に宿泊する
もの必らき多からん此際余一人此の一室を領するは毅
また對し氣の毒の情なきにあらき如何そ他客と雜死し
奉代を授するの責を免れんといはこ夜に入りて七八十人
の宿客あり一室に二人を容るるも客室尚ほ是らき貴客
不子を鳴し主人頗る窮す君は此芝罘を見て主人を招き
告げて曰く此雜階の際余独り大室を領するは本意に非
を達かに他客と雜へよ決して遠慮を要せき主人大に喜
こひ數名の警部を同室せしめんことを請ふ君則ち諾し
て共に居らるる既にして夜深く一室皆ふ寢に就く而
に君は俗に所謂寢亂の悪るき人熟睡の際誤りて是を警
部の頭に加つ警部驚き責めて其の無禮を詰り君此に判

りて眠破れ自ら非を知りても其故實にあらずの故を以て
謝する者皆人せき遂に一場の火祲降ると有り二人睥睨
聲四壁に震ふ隣房の諸案大事起るとし皆去来り会さ
而して君が同僚と年外と見よや事の是非を弁するに違
なく君を困むる一音に責め或は刀を弄するものありに
至る君益々滯し居せしむるも館主の厚く調停するに依
り双方漸やく和解するに至れり時正に一時君衆と共に
寢に就くも耿々として眠る能はざる而して髪部も亦大眠
を得ざる者。如く往々欠伸して牀上に轉轉を兩人無聊
に堪へざるも怒氣未だ散せざるを以て取て後らき自鳴
鐘三時を報するに違むる髪部は堪へ兼てや前刻の事を
忘れたる者の如く先づ口を開て曰く君は眠る能はざる

年岡山君曰く能はま髪察更らに問めて曰く君は今朝何
れを行かんとすやと岡山君曰く寢はすれより十数里
ののど赴かんとすやと二人の胸壁は此問答とより
て忽ち開き敷時の沈黙は之に依りて破れたり髪部は詔
を改めて曰く僕も亦今朝同僚と別れそののどに赴かんと
す諸少時に行かんと岡山君空懐の故を以て共に行くを
知せき唇へて曰く僕も頗る急行を要す天明を待たず度
せざるを得ざる髪部曰く急行最も僕も藁ふ所さる流小
これより直ちに度せんこと乃ち俄かに流束して起る岡山
君徒脚能く歩を髪部尾を能はま敷里を行き大いに疲
る屢々君に休憩を勧むるも君意を而して君も亦久し
く秘密を掩ふ能はざるを度すや先くうに空懐の實を以

てま愛却天て曰く君はしと憂うるを要せし僕清ふ君の
あめに之れを辨せんと於是君漸く金主と爲之と感せし
しと此にののに違ふるを得たりと是れ君の生前屬る余
ま流る所なりと此時の君は宛然水滸傳中の人物なり
一、是山一跡山段敷里徑前其の道の宿屋今日の比は非を
城雲峽内也つかに揺々たる竹輿(マコカゴ)と違ふのみ
徒歩して攀陟せざる者皆之に由らざるものなりと得るを
僅銀甚た不慮なり君の少壯なるや衣服飾らる短靴竹杖
唯見る一個の書生一肩の行李素遊の途次を以て斯山に
登るを路傍の旅衣簾屋に執き竹輿を命せんと初き其他
身の高きこと昨日一路の比に非を君以謂らく賤卒の貧
乏や甚しと呼はりて曰ふ予何ぞ汝等の輿を頼まんやと

直ちに起去て虎と去つ籠屋廻りに之を雷の風雨の時お
らするを説き駕乗を勸む君固く執りて一切聴かむ唯担
夫と肩ひ行李を置はしめ以て登る而て担夫の僅銀の高
下を問はま石徑凸凹攀ること幾下らるる天忽ち黒く山
雲乱飛して風雨驟に至る衣服皆濡れ水に沐浴せらるか
妙し君氣を鼓して冒し進み漸く裏視瀑に至るたましく
後より呼應し来る音あり一輿飛ぶか如く君を過きて進
み去る輿中の客を見れば君の友某姓なり顔みて日暮前
驛の宿所を聲言して去君之に尾して歩行後より、ここ一
時餘に、其宿所に至るを得たり宿屋は君の雨を冒し
て歩行し而も擔夫と共に来るを見て以爲らく是れ巨者
の行李を獲りて後れ走る者のみと君を待馬す、宰領の

賊奴の如く道きて友某姓の下席に置く君之を見て益々
乗駕し来らざるを悔やと是も復及む難し乃ちみづから
進みて上席に移り泰然として事を余し威を弄し力めて
身の匠者に非らざるを明たき而度の主従の様子多た変
りて種々の号令皆君より出つ且那の如く然り旅店の男
女見て之を怪み初めて至極に非らざるを復り而て翌朝
突進に臨み一夕の宿費を計弄するに過分の費用昨日駕
乗の賃銀に教信を是れ饋奉と云も君平生の決心不動の
世行は失錯の向も置穿して更らに一洗路を開くを見
るし

一、君一年廣島に遊ふ知友の人と酒樓に上り歌妓出て、
献酬の間に周旋も中に一尤物あり婀娜たる風姿満堂と

極殺を而て喜は多く租服して邊幅を飾めを座強て亦も
此は君を推して富貴の相方一の金満と考も何人こそれ
は一の黄金時辰の腰間に帯あるありて衆目之に注けは
ちう紋の美人即ち態を送り嬌を呈し最懇懇を君に致を
一宵の近侍情急頓に細うさう君遂に興に乗し故に解れ
控ひ頗る教養を君を既にして君は故の誘引手段に陥ら
んと考もを賞り多た之と去らんと欲するも故は依附し
て離れを君即ち急に嚴島に赴き之を避く而て故の巧慧
之と知り君に先人して嚴島に在り君まそく之に驚き
身を脱するに術なし其に於て旅具カバン以下旅店に放
置し飄忽として匿り因て初めて故を遠くを待たり而
して廣島の友人は君を以て故と馴染め嚴島に流連する

とあり、寧に君も亦達花の人歟とありこそぞ
一、君大子に在る頃色黒く肉瘦せ材高く之れを望めは竹
竿の如し同窓戯むれに呼む竹竿と云ふ後又君の新陽
に於ける一笑袂を捉ひ来りて君を呼ぶにゴド翁を以て
すゴドとは即ち土度より君其稱の俗をも厭ひ自ら枳
堂と改めて之を號こそ然れども固こ音の近きか故に余
したるのみ敢て意味あらうにあらずとて君が第宅を本
御就同外に購ふに定むて偶々庭中多くの枳桐を植ゆこ
こに於るか君の號初めて室に掲ぐ君の没するに定むて
親戚网友君の戒若て議を余君の號の普く友人間に知ら
ぬ、と思ひ之を湮滅せしむるに忍びず遂に以て戒名
とあり

一、君物に於て縁人と嗜好をありしこと云ふも可なり遊戯
の如き固甚存撰の類は無聊を消すもの一具とされたる
も敢て深く嗜まされたるにあらずを暇を稽き獨を授きは
よき運動なりこと時は試みたるも君の繁劇する事
務は君に與あるに充分の全向を以てせきりき君の庭園
に盆栽の癖い辰をて見たれども土れとを唯孝節々々の
の花を見つに止まり價高きもの杯亦められたることふ
し君は常に曰く人は多くの金銭を授けて盆栽を亦むれ
はこそ之れを惜むの情に耐へも終るは園下に托して一
年中間断なく注意せきりか之れを余か毎年夜市
に教養の錢を授け一年享を馳ふの簡易なるに孰れをこ
盆栽の類既に然り書画骨董の類の如き家用に供する者

の外縁人と一も忖められたることをし、要するに君は以
孝の尤もは毫も嗜好を有し、斥られさりし去れはこそ
君か肺患に罹りて百事を抛つや親戚朋友は義人と君を
して無聊を誨せしむるに手既を汚き君にして書画骨董
の類を好みしるは斯く折しは百問の具ともふらん、杯
かこちたることもありて或は君に之を勸めたるも、
ありしかど君は初せきとて断然拒絶せられたることあ
り、但た君は奈良漫遊の際、阿魔王の木波を賤ひ来り之を
床の上に置いて終生珍玩せられたり、而して其の妻玩の理
由を問へば君笑て曰く、此は且れ余か家の裁判官さう
と

一、君は多年法律事務を執りてあらゆる社会に接し、感度

する所、少あらき常に年世血氣の輩を戒めて曰く、人は藝
娼妓杯を妻に持つべきものにあらき、余の経験を以つて
するに詐偽取財の罪を犯きしもの、其輩に最も多きを、見
蓋し藝娼妓を妻とする程のもの、皆一時金廻りのよか
りし者、みこ之れを細心を妻としたる、故大抵は融通不
如意とするも、固く藝娼妓の輩は樂をこそ得に、するを得
若は一日も優に、得べきものにあらき、れは教養を続け
人よりは、且れ其事をあきらむる可らき、去れはこそ詐偽取
財の辨獲を依頼し、来るものに、其婦人多く其妻性を尋ぬ
れば、抵ね花柳界より轉籍したるものさうと
一、君は寛仁大度の人さうし、而して寛宏は敵にまて、及ひ
たり、君か法律事務を、其業を、拙め、門前、法律依頼人を以て充

填すこと迄むこや同輩中君を嫉む者あり君を中傷せん
と解し一書と君に托し事務所負たらしめ窈かに君の
勤弊を偵察せしむ而して他の事務所負之れを知らざる
ちり余當時新陽に在りて灰かに之れを聞き一書を教し
て君に注意する所あり而して君の返書を見れば君早く
之を知り委曲に其事情を悉し且つ曰く此般の事度も関
心を須へむ余は寧ろ事務所負の實る所こそありて同輩間
の交を破らんことを恐る君は之を他言する勿れと
余は其度量を服し亦た其の眼光の非常なるに驚けり
一君謙遜の徳を有まると名自うう候もること甚だ篤く漫
りし心服を以て人に許さむ而して持し小野梓氏もは心
服し辰られたるか如し君常に曰く余が小野君に服する

所は其時事の大問題に對しぬらそ一家の定見を抱ける
に在りと而して君の性頂小野君と異なる所ありしに
るも其同一の所も亦甚たまし其後多かる所其自侯の篤
き所其勤勉する所其清潔なる所其まことの仕事を擔ひ込
む所其白うろ萬事に當り他人に事を放任し難き所等兩
者か性頂を一にせる所あり而して共に肺患に罹りあき
あきの身を以て早く歿せられたるの合致に至るは最
も悲むべし

一君の肺患に罹りや辱む区子の別墅に赴き病を養ふ而
して井上毅君同病相憐むの情ありて井上君の別荘も亦
区子に在り於是の日夕相往來して交情甚だ密なるもの
ありしと是も学孤の同しあらざるは是も異ならず

と傳ふ岡山表は井上表の勤勉より和漢の學を重んずる
を稱せしむる以上之意見に至りては氷炭相合小すむ
のありて井上表の政次意見より言心は力を極めて排撃
し才量も假借する所あらざりし表の如きは後の異同
よりて交を更へざる者と云ふべきか

一君は能く人の爲めに夫人を媒妁したる人なりし君の
媒妁若くは周旋に依りて婦を定むるに至りたるもの余
の知る所を以てするも六七以下ならず即ち金井延朝倉外
茂鐵岸十三郎高田早苗岡崎正也植村俊平岡田良平等の
教氏の如き皆然り而して余も亦君の媒妁に依りて婦
を定めたる一人なりし事表の在學中も在れは蓋し余の
信婚を以てて媒妁の事始とす

一君の脚患に罹りや余は屢々君の勤勉の過度を戒め其
の劇務の一事を割て人に委せんことを以てせり而して君
は之を聴かずして曰く余か性人と同しからざるや以上
は自ら全部をやらざる可らざる事自ら自らやり事人にや
らせる如きは余欲は去故に筆務を省かんとせれば全く
事務を廢するの外なしと君の性實に如くして蓋し君を
殺したるもの豈に此の特長にあらずとせんや

一君は書生の風次第に軟弱に赴きを慨し如何にもして
之を矯正せんことを欲せり去れば君も事務所負を率て
墨壇の邊に徘徊する際も如き自ら産起して競争を試み
墨壇より日本橋に至るの長程を十魁もせき走り通し事
務所負を以て辭易せしめたることもありき

一、君が師忠に罹らざるまゝ日清癩長幹の人を道を行
くまは頗る健脚の人なりし亦自ら健脚を誇り明治
年君と東海東山諸道を跋渉せる時の如き君は常に木
履を穿つて一日十四五里も歩して疲方を覚えき富士の
峻坂の如きすら木履を以て上下し案内者た比きれば何
時も十数箇前に在りたり

一、保安集例の獲布さ小たる頃一日教員の壯士君を龍岡
町の即ち向ふ君は壯士に誇りて曰く卿等何んぞ城のサ
天地に局促するをある君は衣食給せず人は何んぞ大海
洋に於て海賊を御かきと壯士一驚して去る

一、君の性謹厚苟くも良心を背くの非違を犯さき其大志
に在るときの如き論々たる字まは概ね校禁を犯し怯と

して之を耻まうに君は在学八年の長き嘗て校規を犯し
たること無し而して唯一回校禁を犯し一失後を貶せり
は君の好奇心を去つ君の法科大学を卒業せんとするや
卒業式の用に供せんとして日敷所也より一領のフロッツリ
コートを買ひ来る君之れを服して同窓に戯れを曰く余
は在校中諸君の如く門限を外して牆を越へたることお
し而して今や業を卒へ校外の人こそあらんことを余は越牆
の真味を知らずして去ることを憾む今夕之を試みんと其夜
門期を後れて歸る君茶懐頭を擡て室に入り来る同窓異
むて向へは曰く慣れぬことは仕まつきものなり余は牆
を越ゆるの際過りてフロッツコートを裂けりと同窓皆お
笑ふ而して君も亦苦笑せり

一、君極めて子を愛す休日毎に携て東台の処に散策する
二、ことを創こさず夏日の如き君劇務を終りて家に帰れば
ぬれた衣服を脱ぎ裸体四足とす馬状を学むて之れを
児女を載せ室内を周回一番し其の歓心を博するを状
とせり

一、君は終生酒色三昧を棄れずおに遊蕩子の如くに傲ふ
て放歌狂舞の如き酒席の戯を好まざるは勿論あり然れども
君は滑稽の才に富み滑稽中往々滑稽を弄して人を笑はしむること屢々あり而して君の特藝として
同窓間に喧嘩するもの一あり其文字に在るとき一日
共執会の同人墨堤粿の植事に飲む坐に滑稽子あり酒令
を定めて曰く清ふこれより各々隠し藝を演じん

無
集
藝
の

は全に注下器三杯にきりて而して順次一番の藝を演じ
終りて君は及みや衆目皆君に集る君處然坐を起りて
隣室に到る既にしとあてまれば全身赤毛布を纏めて妙
に遠磨の状をなす満堂あめに絶倒すこれより植堂の遠
磨同窓間に喧嘩し君亦た屢々之れを拾て人を笑はし
七

一、君の養はれて赤岩家に在るや美談あり初め赤岩家の
子無きや養父母の君を愛すること實子の如くすし其
後一子を奉くや初めの如くすらき一日養父君に向て
大雅題を提出し曰く母乳に乏し聞く難く食は能く
其乏を補ふを得と堅子平素酌を好む連ぬに母のおめに
教尾の難を陳進しまればと君唯々として余を奉するも房

州は里見八犬傳によりて何人も知る如く鯉を養せしむるの地なり何くも行くとてか此の魚を亦むるを得ん君百方之を亦め回つて其寺の池に鯉を養ふと聞きて之を獲んとすも固と寺僧の珍愛する所一尾と云も實に得ん事非き君沈吟種々久しと思くらく彼の寺段は潮田氏の檀那寺なり氏に依頼して寺僧に請はく或は割愛を得んと走りて潮田氏を訪ひ請ふに實を以てす潮田氏感激直ちに寺僧に請ふ寺僧も遂く君の孝を感し思くらく古は雪中筍子を得たる孝子あり今我房おに一對の孝子とおき是れ小室に房の養せしむる余豈に已々たる池實を惜まんと君を以て隨意に十数尾の鯉魚を釣らしむ君謝して欣然家に帰りて之れを養母に供ふ今に至るまで

房州に於て養疾ときと此の一紙は潮田氏の直流の由朝倉外茂録氏より聞けり

一、君は本年五月十九日病状に臥す遂に不起と云うたか未だ人より向くに臥奉に先づ二週前より身体常の如くよりを執さい出没したるとの事あるか君は多忙に任せて取て意にもぬせきありし二十九日に至りて産熱微かに高まり遂に病聲に臥されたり醫師は初めより病症を利し兼ね或はインフルエンザと云ひ或は腸室絞断と云ひ免角の法せきりかこ主因は肺患にあらしむる事ありしとぞ執は四十度と経来したれど君も人も不起の大患とは思はさうし二十九日朝時厨より上り五日百グラムの血を下し亦た少量の咯血ありてより瘧み

身体が衰弱を来し午後 時頃醫師の来現せる頃は最
早脈も絶へくさうしよを醫師も餘りの事に嘆驚さる
程よと問もさう 時長逝されたり而して病病は遂に
決せき室に醫學上の一問題なりと云ふ

一、斯る激症すれば君も臨終の迫る 時向所まとは不
死の病には思ひ成らざりしよ似たり殊に臨終当日は下
血の考め熟度も頼みよ低降したれは神氣も前日より衰
かちうしよを自ら不起の大患と思はざりしよ 以て手に
あらき但た 時頃醫師が皮下注射を行ふを見ておめで
不起を覚ら小なるもの、如く舎兄定恒君に一二の遺言
を傳ふる間もさう眠るか如く瞑せられたり
一、終始傍らに在りて看護せられたる令妹の傍らより所

二、念此は君は死前一日別ち廿八日^通まき考め氣をそく
れずとて頻りに灌腸を命せられたるも令妹は然る可ら
すこと切よ之れを命せられたるよを遂に其の言に任はれ
たる丹世由さるか君も當日灌腸せんよは直ちに下血し
て或は臨終を一日早めたりしよ未だ知る可らき
一、君は臨終に定恒君を打見やり私は死を恐小ませんと
二度汁傳道して瞑せられたりことさふ
一、君の臨終に就て最も悲惨に耐くまりしは細君偶々分
岐後 日を経て別室に在りて此大不幸を知られさうし
二、是れさう醫師は産婦に此の事實を知らす可らまこと
固く戒むよをさむさう君の症執病に變りたり尻底を
へからまこと言ひくさう其妻は喪を秘して翌朝妻君を醫

却り二院に入院せしめ而る後初めて喪を度せり嗚呼人生傷心の事豈にこれより甚しきものあらんや余は委曲に此時の事状を尽きたる思ひする也

一、本年五月君の度病は君の肺患に罹りて以来三回之重患とき君病中戯れて曰く僕の病氣も愈大審院へ持出されたり今度敗訴しては放り直せしと而して終つて終審の宣免を受けず死を悲うる

一、君は五月の病患に依りて斃るゝ寛裕無りしか如し然れども君の身体は死期を暗示せる者の如く度病の先たり一ヶ月前より細君に向ひ今度は愈々事務を全廢して氣倦み遊ばん但た看手の事件を結了せんとは尚ほ二ヶ月を要せしと推られたる由未三人より聞けり

一、君が臨終の夜九時昆田文次郎君訃報を齎らし来り余偶々家に在らざる歸り来りて之れを家人に聞き餘りの意外に信を置く能はず人と馳せて実否を問はしむるに至り皇水独り余のみならずも他人も其皆容易に信せし聖朝表を度して後諸方に電報せしに推し返し信法を問ひ来りたるもの甚た多かりき

一、君臨終の聖朝余は君の遺骸を見んと龍岡所の宅に赴きたるに遺骸は寢室より座敷に移され面部は白布を以て覆はれをありたり余は白布を脱して君の顔を見んと知したり然れども白布を脱するに同時に劇しき悲哀と深き感慨が余を撃つると思ひは氣腫して白布を脱せんと知して能はずりき偶々前島峯君夫婦来り余は小勇

朝野雜載

二

を敷して白布を展く君の死顔を見る其の時の感懐事
て如何筆端涙に溢るる之れを叙するは是れさうさう嗚呼
平生被服の事を考へる人死するも絶えず苦状を見せ
君の温顔手書に墨するさうさうと笑へる如く眠れる如く
君が臨終に死を畏れぬと云ふもの豈に勇を衒ふの言ふ
らんや余は之を君の死容を見る

朝野雜載

五七巻

